

# 「家がいいね」 第85号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2011. 6. 7

成し遂げようと思ふ事には足を止めるな 9の段

春暮れて後、夏になり、夏果てて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は即ち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり、梅も蕾みぬ。木の葉の落つるも、先ず落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる気、下に設けたる故に。持ちとる序甚だ速し。生・老・病・死の移り来る事、また、これに過ぎたり。四季は、なほ、定まれる序あり。死期は序を待たず。死は、前よりしも来らず。かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つことしかも急なるるに、覺えずして来る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の満つるが如し。

吉田兼好

徒然草 第155段(後半)

春が終わって夏になり、夏が終わって秋が来るのではない。春はすでに夏の気配を感じさせ、夏はすでに秋へと通じており、秋はすぐに寒くなって、初冬の小春日和の日には、すでに草は青くなり、梅のつぼみもできてくる。枯れ葉が落ちるといっても、葉が落ちてから芽をつけるのではなく、木々に兆しかけてる新芽に堪えきれずに葉が落ちるのだ。初春をむかえる新芽の気を、内部に蓄えているが故に、枯れ葉はあつという間に散る。

「生老病死」の移り変わりも、この自然の推移に似ている。四季には、それでも定まった順序があるように見えるが、死期は順序を待たない。

死は必ずしも前より見える形で来ない。いつでも背後から迫っているのだ。人は皆、いずれ死ぬものと知ってはいるが、必ずしも急には来ないのだから安心してはいるうち、死は予測できない時に到来する。ちよつと沖の干潟が遙か彼方に見えても、足元の磯より潮が満ちているようなものだ。

今を生きよーと兼好も田中も言っているのですね

人間、いたずらに多事  
人生、いたずらに年をとる  
いまやらねば、いつできる  
わしがやらねば、だれがやる

平櫛田中(でんちゆう) 長命の彫刻家



天気と気分、重なっているんだってね

「終りよければいせの会 講習会

定例開催… 第2水曜 夜19時

場 所… クリニック隣 縁(えにし)の家

4月13日「介護が始まる時」

5月11日「遺言の書き方」

6月 8日「医療での意思伝達」 講師と懇談

7月13日「今の世の葬儀」

参加無料、終了時にはエンディングノートが完成

みえ生と死を考える市民の会 講演会

6月18日(土)

13時〜15時 津市

三重県総合文化センター

大ホール 会員外も可

国立がんセンター前総長

垣添忠生さん「妻を看取る日」



愛する人を送るのが最も難しい。治療を諦めてから数日の在宅生活。残された者の癒しは仕事と酒だったと語られます。喪失と再生の記録です。



自宅での人生を  
最期まで支援します

〒516-0805  
三重県伊勢市御園町高向 927  
電話 0596-20-8104  
ファクス 0596-20-8105  
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp  
新ホームページ http://isezaitaku.com